

「都産技研 ビジョン2050」 策定 に向けて

都産技研設立100周年記念事業プロジェクトの一環として、都産技研では2050年をターゲットとした「都産技研ビジョン2050」の策定を目指しています。未来に向けた新たなビジョンは、どのような思いでつくられたのか。ビジョン・ロゴワーキンググループの4名に話を聞きました。

都産技研の100周年を華やかにお祝いするとともに、2050年の明るい未来をイメージしたイラストを制作しました。100周年記念ロゴ(100ロゴ)とともに、設立100周年記念事業を盛り上げています。

都産技研がさらに100年続くために必要なもの

——「都産技研ビジョン2050」策定に向けた経緯を教えてください。

福田 100周年記念事業にあたり、都産技研がさらに50年100年と続くには、長期的なビジョンが必要であると考えました。ビジョンによって都産技研が「どんな社会を目指しているか」「その社会に向けて何が出来るか」を明確にすれば、日々の業務に未来への道筋が示せるはず。そこで2020年7月に我々4名でワーキンググループを立ち上げ、ビジョン案の検討を進めてきました。

——ビジョン案の検討はどのように進められたのでしょうか。

福田 メンバーに将来の計画を立案した経験がなく、普段はそれぞれの専門技術を活かして技術支援や研究を行っている研究員ばかりで、専門分野もバラバラです。そこで、まずは興味のある分野からビジョンを調べ、視野を広げることから始めました。

中村(佳) 私はロボットが専門なので、ロボット関連の企業や研究機関のビジョンを調べました。内閣府など行政のものも参照しています。

池田 私はあえて分野を絞らず、周年事業に取り組んでいる大学や企業を中心に見ていきました。都産技研には既に「都産技研憲章」があるので、役割の住み分けも意識しましたね。

福田 その後WGで素案をつくり、2021年5月には都産技研職員から意見を募る「パブリックコメント」を実施しました。私たちだけでは気づけないような鋭い指摘もあり、ビジョンが私たち4人のものから「都産技研のもの」になったように思います。

100年後ではなく「30年後」のリアルを想像する

——ビジョンで定義された4つの「社会」は、皆さんがそれぞれ担当されたと同じでした。具体的にどのような社会像を想定されていますか。

福田 「環境の変化に適応できる社会」では、自然環境のことだけでなく、技術の変化によって私たちの生活環境が変わることについても触れたいと考えました。情報通信が発達すれば、天候予測の精度などが向上し、人的被害の抑制につながるでしょう。海洋や空中といった空間についても、今までにはなかった新たな活用の仕方が進むのではと考えています。

中村(健) 「すべての人が活躍できる社会」は、人の活動する場がサイバー空間にも広がり、ロボットをはじめとする知的機能を備える人工物が活躍する範囲が、人間の活動範囲に近づくという予想を前提としています。例えば、身体的なハンデがあっても、サイバー空間での活動は自由で、フィジカル空間では知的人工物により活動の不便さから解放されることで活動の場は広がっているといった社会です。

中村(佳) 「自由にコミュニケーションできる社会」では、コミュニケーションが時間・空間・場所の制約から解放されると考えています。サイバー空間でのコミュニケーションも、空間の制約に縛られないものと言えるでしょう。「触れる」「嗅ぐ」など、五感をリアルに伝えることが可能になれば、場所や行動の制約もなくなるはず。

池田 「『自分らしい幸福』を感じられる社会」は、人々が働き方や暮らしを自分の好きに選べる社会を想像しています。個人の選択を尊重し、実現を助けるサービスや制度、デバイスが2050年には整っているのではないかと。人々が幸福を感じることで社会全体として精神的な余裕が生まれれば、自然災害や新興感染症といったイレギュラーな事態にも、柔軟に対応できるのではないのでしょうか。

——それぞれビジョンを策定するにあたり、苦労されたことはなんですか。

中村(健) 未来を想像するのは自由でも、納得がいく予想をするには知識が必要なのだと痛感しました。100年先200年先といった遠い未来ではなく、「30年後」という生々しい時間軸なので、今の技術もきちんと踏まえて考えねばなりませんから。

池田 検討の中で、「東京都に絞った話にせず、もっと大きな社会像を語ろう」という意見が出ました。最初は担当業務に引きつけて考えがちだったので、もっと高い視座で考えることを意識しましたね。

中村(佳) 業務に寄せてしまうという面では、抽象度を高めるのも苦労しました。どうしても技術的なことを細かく書きすぎてしまうんです。4つの社会像で粒度がバラバラになってはいけないので、記述レベルを揃えるのはギリギリまで苦労しました。

「都産技研があるから大丈夫」と思っただけのために

——今後、都産技研はどんな役割を果たしていくのでしょうか。

福田 時代の変化に伴って、必要とされる技術も変化し続けていくと思いますので、新たな要素技術の開発など中小企業の皆さんと共に進められたらと思います。一方で、新しい技術がすべての人の日常に浸透するためのサポートも都産技研の役割ではないかと。

中村(健) そうですね。すべての人が活躍できるように、講習会やセミナーで溝を埋められたらと(笑)。人間と知的人工物をつなげるために、フィジカル空間とサイバー空間を調和させる技術も開発したいですね。

中村(佳) 新しい技術を社会に馴染ませるために、どんどん実際に実装していきたいですね。そうした「社会実装」が進めば、新たな人との出会いやつながりが生まれ、その結果また新しい技術が生まれ、さらに社会に浸透させて……と、良いサイクルを回せるのではないかと思います。

池田 多様性が当たり前となる時代になれば、「多品種少量生産」「オーダーメイド」など、一人一人のニーズに応えるものづくりができる中小企業にチャンスが訪れるはず。都産技研として、今後も的確な支援ができればと考えています。

福田 ビジョンに掲げた「4つの社会」は明るい未来を想像し目指していける内容になっています。都産技研がさらに続いていくように、そして中小企業の皆さんから「都産技研があるから大丈夫」と思っただけのように、このビジョンが未来を明るく照らすたしかな光となれば幸いです。

ビジョン・ロゴワーキンググループ プロフィール

環境の変化に適応できる社会

機械技術グループ長
福田 良司(ふくだりょうじ)



自由にコミュニケーションできる社会

ロボット技術グループ 研究員
中村 佳雅(なかむら よしまさ)



『自分らしい幸福』を感じられる社会

複合素材技術グループ 副主任研究員
池田 紗織(いけだ さおり)



すべての人が活躍できる社会

プロセス技術グループ 主任研究員
中村 健太(なかむら けんた)



100周年記念事業の活動

1921年に府立東京商工奨励館として端を発してから100年、その歴史を振り返り、さらに未来につなぐために、都産技研はさまざまな100周年記念事業に取り組みます。コンセプトは「変わる産業 変わらない使命」。100周年記念ロゴマークは所内から公募し、全33作品の中から職員投票等により決定しました。

100年の歴史を振り返る活動として、府立東京商工奨励館当時から残る貴重な資料を整理し、デジタル・アーカイブ化することによって内容を未来に引き継ぎます。また、記念誌を制作・発行し、都産技研と産業の歴史を振り返ります。

対外に向けては、未来に向けたビジョンの策定や、100周年をカウントダウンする記念展示を実施。100周年記念事業を映像化した記念動画の制作も進行中です。2021年度内には

100周年記念式典の開催を計画しています。都産技研に携わられたすべての方々に、これまでの感謝と、これからの決意をお伝えするイベントとなる予定です。



▲ 設立100周年記念事業プロジェクト特設サイト
<https://www.iri-tokyo.jp/site/100years/>